



# 亀中だより

No. 15 令和8年7月1日 文責 岡田

For The Students!

広島への修学旅行が始まって、今年で3年目を迎えます。その目的は、人類史上最初にして唯一の被爆国である日本として、広島や長崎での出来事を正しく受け止め、核兵器廃絶、平和を考える出発点とすることにあります。今年は9月となりますが、3年生は修学旅行への事前学習（平和学習）を重ねています。修学旅行では平和記念公園で原爆ドームや平和記念資料館を見学し、平和セレモニーを行うことでこの学びの集大成を行いたいと考えています。

## 沖縄慰霊の日



そんな亀山中学校も、コロナ前は修学旅行の行き先を沖縄としていました。広島と同じく、その活動の中心には平和学習があり、一般住民を巻き込んだ悲惨な地上戦が繰り広げられた沖縄のことを学んできました。修学旅行の行き先が変わった今でも、私たちはしっかりと沖縄戦についても知っておきたいものです。

6月23日は「沖縄慰霊の日」でした。沖縄戦では、日米合わせて20万人以上が亡くなりました。このうち約19万人が日本側の犠牲者です。沖縄県民は、一般住民約94,000人（推計）、軍人・軍属28,228人の計約122,000人が亡くなり、県民の4人に1人が犠牲になったと言われています。

平和祈念公園で行われた「沖縄全戦没者追悼式」では、玉城デニー沖縄県知事による平和宣言に続いて、今年の「平和の詩」に選ばれた豊見城市立豊崎中学校2年亀谷琉奈さんの「生きたいと願った証」を本人が朗読されました。この詩は、亀谷さんが5歳頃に曾祖母の右足の傷跡の理由を尋ねた際に聞いた戦争体験がもととなっています。亀谷さんは会見で、「この詩を通して命の大切さを感じてもらい、ひとりひとりが平和について考えるきっかけになれば」と語られました。次頁に掲載します。ぜひご一読ください。



沖縄県公文書館

写真：「沖縄県公文書館」所蔵



# 平和の詩 「生きたいと願った証」

豊見城市立豊崎中学校2年 亀谷琉奈さん

あの日の沖縄には、青い海も優しい風もなかった 空は黒く、地面は揺れ、人々の叫び声が絶えなかった

爆撃の音が心まで壊していく

まだ若かった曾祖母は小さな体で必死に走った

血だらけの道を倒れた人たちの横を もう動かない人を見ながら、涙を流す暇もなく、ただ生きるために

そして愛する夫の命を案じながら 「お願い 生きていて」

その想いだけを胸に足がもつれても、呼吸が苦しくても、転びそうになっても前へ前へと走った

しかしその願いはもう二度と届かなかった

その時のことを話す曾祖母の声は今でもとても優しい

でも 私は知っているその優しい声の奥に今も消えない悲しみがあることを

細い足、しわしわの手、小さな背中 長い年月を生きてきたその姿を見るたび私は戦争の重さを感じる

そして曾祖母の右足には今も傷が残っている それは戦時中 自分で引っ掻いた傷

灰色の空の下 爆撃の音が鳴り響く

恐怖と不安でいっぱいになり、右手に握った石で、自分の右足を何度も何度も引っ掻く

気づけば手も足も血だらけだった 私が真実を知った時、胸が締めつけられた

どれほど怖かっただろう どれほど苦しかっただろう

生きたい 死にたくない その想いだけで曾祖母は必死に生き延びた

戦争は人を傷つける 体だけじゃない 心まで壊してしまう

家族と笑う時間 友達と過ごす日々 「また明日ね」と言える幸せ

そんな当たり前を全て奪ってしまう

でもそれは当たり前なんかじゃない

血と涙の中を生き抜いた人たちが命を繋(つな)いでくれたから今の私たちがいる

もし、曾祖母があの日 走っていなかったら

もし、あの日 命を落としていたら 私はここにいなかった

曾祖母の右足の傷はただの傷じゃない

「生きたい」と強く願った証 「戦争は二度としてはいけない」という叫び

私はその想いをこれから先も伝えていく もう誰にも血だらけの道を走ってほしくないから

もう誰にも愛する人の命が奪われることに怯えてほしくないから

もう二度と沖縄の空を戦争で染めてはいけないから

平和は当たり前じゃない

たくさんの人の涙と苦しみと「生きたい」という願いの上にある

だから私は忘れない

沖縄戦で苦しんだ人たちを 愛する人を守ろうとした想いを 泣きながら生き抜いた人たちを

そして曾祖母の右足の傷を

「生きたい」と願った証の傷を平和な未来へと繋いでいくために